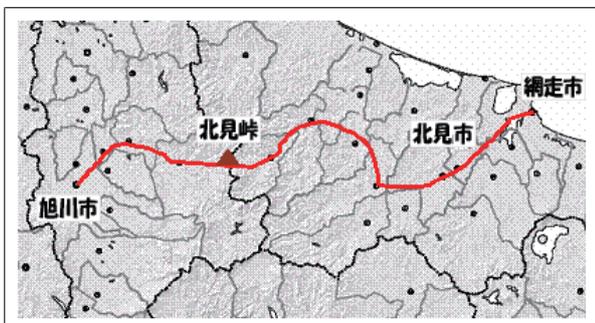


第5節 中央道路(囚人道路)

北見市民の生活基盤の礎となったのが中央道路で、俗に囚人道路と呼ばれた道路です。

中央道路とは現在の道路に当てると道道104号(網走～端野線)から端野～北見～国道39号～留辺蘂(道道103号)～佐呂間花園～共立峠～生田原～遠軽～北見峠となります。



赤線が中央道路

(道路改良により変化してきました)

北見市ホームページより

屯田兵制度創草期に薩摩出身である永山武四郎(1837年生～1904年没)は、明治21年(1888年)第2代北海道長官時代となり、明治19年(1886年)5月から現三笠から着工していた上川道路(現国道12号)が旭川まで樺戸集治監囚人によって明治22年(1889年)に完成したことにより、網走から旭川を結ぶ道路開削は、ロシアの南下政策から国防上急務でした。

後に網走監獄と呼ばれるようになった「釧路監獄網走囚徒外役所」と空知集治監(三笠)の囚人を動員して開削したのが中央道路(囚人道路)です。

明治23年(1890年)釧路集治監(標茶)から約1,200人の囚人が網走に移されました。

翌年には300人増やし、雪融けを待って5月から原始林に駆り出され、斧を振りかざし大木を切り倒し、土砂や切り株をモッコに入れ担ぎ夜にはカガリ火を焚きながらの重労働で、6月には端野町菊池坂あたりまで道路がきている早さです。

1組220人、4組に分けられ、それぞれ3里半(約14km)を受け持ち、15間幅(約30m)に立ち木を切り倒して、3間幅(約6m)の道路を造るのです。

囚人達の後ろには絶えずサーベルや長棒を携帯した看守がおり、二人ずつ足に鎖でつながれ、傷だらけの体にヤブ蚊・ヌカ蚊の大群が襲来、栄養不足からのカッケなどの病気、不衛生からの風土病などと闘いながらの工事でした。

このような残酷無比な過酷な労働から逃げ出す逃亡者は見せしめのために惨殺され、病死者も道路に捨てられていき、工事が終わった1年後には211人の犠牲者がでたそうです。



▲永山武四郎

(ウィキペディアより引用)